

平成30年1月9日(火)

老球の細道384号

究極のコミュニケーション

会津バスケットボール協会 室井 富仁

子どもたちの体力低下が叫ばれている今日、簡単な解決方法があると豪語する東京大学のある教授がいる。その教授曰く「東大の入試科目に体育を入れればいい」。なるほど、東大の入試に体育の実技試験が加われば、必然的に運動をする東大の受験生が増える。そして、東大がそのような入試制度にすれば他の大学も右ならいするのは予想できる。したがって、現在のように運動することをやめて勉強だけの受験準備をすることはなくなり、運動しながら勉強もするという学生の本来の姿になる。その結果、子どもたちの体力低下も自然に解決するということである。

ところで、センター試験がもうすぐだから東大教授の豪論を書いたのではない。通信もたまにフェイントをいれないと面白くない。この東大教授の著書『賢い脳をつくるスポーツ子育て術』(誠文堂新光社)を読んだ。その中に以前通信で書いた三つのコミュニケーションパターンにプラスする新たな内容が見つかったので紹介したいのが本心である。

今まで私が考えていたスポーツにおけるコミュニケーションとは、あくまでも「オレ流」であるが、一つは、モチベーションアップ。気持ちを奮い立たせる大きな声を掛け合うことでチームに勢いをつける。二つ目は、コーチング。やって欲しいプレー、やりたいプレーをチームメイトと指示し合う。そして三つ目は、シチュエーション。戦術や作戦などをプレー中や作戦タイムにおいて確認し合う。その道の専門家に言わせれば勘違いもはなはだしいのかもしれないが、もうこの年になると我流のガリガリになってしまう。

そしてコミュニケーションのもう一つのパターンとは、「究極のコミュニケーション」(オレ流のネーミング)という。それは、試合で負ける決定的なミスをした失意の友達にどのような声かけをするかということである。

野球なら9回裏2アウト。1点差リードの場面で、チームメイトがエラーをして2点が入り逆転負け。サッカーなら同点のままにPK戦に突入。チームメイトのPKが外れて負けてしまった。バスケットボールなら残り時間6秒で1点リード。自チームのボールだったがチームメイトのパスがカットされて、そのままシュートに持って行かれ逆転負け。

競技経験者ならこのような場面を何度も経験してきたことだろう。自分がその当事者だったり、またはチームメイトが当事者だったり。このような時に、そのミスをした当事者にどのような声かけをしたらよいのだろうか。または、自分が当事者だったら、どのような声かけをして欲しいのだろうか。今までそんなことを真剣に考えたことはなかった。

「お前のせいじゃない、たまたま最後がお前だっただけだよ。次がんばろう」と言っただけでなぐさめるか。なぐさめてもらいたいのか。「お前のせいで負けたんだぞ!」とくやしさをぶつけるか。カツを入れられたいか。「声をかけない」という選択肢もある。ほおっておいてほしいと思うか。

スポーツの場だけでなく人生の色々な場において、失意に悩む友人、知人にどのような声かけをすることができるか。ありきたりの儀礼的な声掛けで良しとするのか。人間関係の真価が問われる場面である。正解のないコミュニケーション問題であるが、その時に適切で自然な声掛けができるよう日々悩み、考え、学習しなければならない。